

緒言



自己の安全と幸福と尊嚴とを確保せんと欲せば國家の隆昌を計らざる可らず、國家の隆昌を希はば國民の和合に力めざる可らず、國民の和合を希はば社會事業の隆昌を企てざる可らず、社會事業の隆昌を望まば富豪の自覺的責任、出資に俟たざる可らず、之れ即ち小我を去りて大我に生きる所以にして、文化生活の基調たり、自己に眼覺めたる合理的安全地帶たり。

現今富者に對する反感、日に旺んならんとする傾向あるは、洵に憂ふ可き現象にして、其極端に走らんか階級闘争となり、國家の衰退となり、果ては國體をまで破壊せしむる懼れなきを保せず、斯は之れ物質偏重の餘弊にして、世の多くの富者が、大我に生くる大いなる幸福を求めずして、小我に生くる小幸福をのみ享有せしが故なり、換言すれば、衆と共に樂しむ事は、人生に於ける最善最大の幸福なるを思はずして、徒らに獨り樂しむ事にのみ趨りしに由る。蓋し國家社會に奉仕するは、富者にのみ求むべきに非らず、全國民の責任なる事は、贅言を要せずと雖も、無産者は勞力を以て奉仕する以外、之を求むるも餘裕なきにより、餘裕綽々たる富者に求むる所以なり。

吾人は此見地に基き、富者各自應分の資力を提供して、社會事業に貢獻するは、即ち君國に忠なると共に自己に忠なる所以なりと、思惟するものにして、徒らに謂れなき犠牲のみを強要せし、本能無視の舊道德を強ゆるものに非らざるなり。

趣旨

東京市府に於ける社會事業の大勢を觀るに、其尤も振はざるは、細民合宿所事業にして、各慈善團體の經營に係る無料及低廉宿泊所十ヶ所の收容力は、僅々八百五十名に過ぎず、殘餘約二萬九千名の無宿者は、平均四十錢の宿泊料を支拂ひて、警河向木負宿に宿泊しつゝあり、然も彼等細民の日收は、平均一圓五十錢にして、此中より日々四十錢の宿泊料を支拂ふは、彼等として非常なる苦痛ならずんばあらず。

故に彼等をして生活を安易ならしむ可く、低廉宿泊所を増設するは、社會事業中の急務たるを失はず、然も既設の合宿所中には、彼等が何より慰安とする浴室すら設けざるあり、其他修養設備なきもの、娯樂設備なきもの、下駄履きするもの、等々あり、